

## 第14回地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議

### 議事要旨

日 時 平成29年12月8日(金) 17:00～18:00

場 所 中央合同庁舎4号館4階第2特別会議室

#### 1. 開会

#### 2. 議事

##### (1) 最終報告(案)について

○ 事務局より、資料に基づき説明があった。

○ この説明に関し、以下のような発言があった。

(座長) これまでいろいろな議論をし、意見交換をさせていただいたと思うので、余り根本的な部分の異議はもう出ないものだと思うが、何かつけ加えて御意見があれば。

－異議なし－

(座長) それでは、最終報告の案について、特に異議がないようなので、最終報告書として梶山大臣にお渡ししたいと思うが、この約1年間、皆さんとともに意見をまとめてきた中で、私の所見を申し上げて、手交に入りたいと思う。私も、いろいろな政府の仕事にかかわっているが、こういう大きなテーマはどうしてもいろいろな部分で部分最適論が出てくる。そのときに、本当にしっかりした全体の見える化をしていないと、全体最適が崩れてしまうことがよくあるので、今回、特に事務局にいろいろな角度での見える化をお願いしたつもりである。私自身は、この国の一番大きな課題は、東京が地方からヒト・モノ・カネを集めてここまで発展してきたのにも、もう限界が来ている。東京は、国際的なヒト・モノ・カネを集める都市でないと、国全体の需要創生にならないという危機感を持っており、その一方で、地方が疲弊したこの状態も、何もしないでいると、ますます疲弊するだけだということで、地方創生と東京の国際都市化が報告書の全ての基本にあるべきだと思う。地方大学の振興と東京の大学の定員抑制については、いろいろな意見が今でもまだ残っていると思う。地方における若者の雇用が創出されないと、どうしても東京に出たほうが、全てにおいて有利という社会は変わらないので、とにかく地方における若者の雇用創出のために一步一步進めていく必要があるということで、先行しておられる具体例をできる限りヒアリングさせていただいた。これまで、先行している例として、大学発のベンチャーということで、山形のSpiberからお聞きし、地方の私立大学の経営改革も幾つかお聞きした。地方の県や市の産官学の連携、石井委員の富山の話なども聞かせていただいた。私の印象だが、この成功例に共通している要素は、それを引っ張っておられるトップの本

気度である。私流で言うと、何か支援してくれたらやりますというのは全く信用しない。自分たちで、自力でお金も少し集めながらここまでやっている、だから国のほうもこういう支援をしていただけないかというように、それを引っ張っておられるリーダー自身が本当に熱意を持って回られる姿を見ていると、やはり本気なのだという気がする。この最終報告書の後には、ぜひ早く地方ごとにこのような具体例の話を展開し、既にもう我々の知らない先行例もあると思うので、それを洗い出していただき、個々の事例の本気度を評価して国が支援すべきだと思う。特に私の全く個人的な意見だが、この国はどうしても大企業中心になるが、これからは地方において中核となる中小企業と大学発のベンチャーがより重要となり、大学に対する力の入れ方が問われている。若者にチャレンジする機会を与えていくことが、この国にとって物すごく大事なのではないかと考えている。梶山大臣におかれては、最終報告の趣旨を十分尊重いただき、地方創生に向けて、関係諸政策の充実と必要な制度改革に早急に取り組んでいただきたい。

#### －最終報告書手交－

##### <梶山大臣挨拶>

○ 梶山地方創生担当大臣から、以下のとおり挨拶があった。

委員の皆様にご挨拶申し上げます。この最終報告は、地方大学の振興を中心に、東京の大学の定員抑制、そして若者の雇用機会の創出の3点を一体的に推進し、地方における若者の修学・就業を促進する、従来にはない抜本的な対策を取りまとめたことと感謝している。ここに至るまでに、委員各位のそれぞれのお立場、そしてそれぞれの視点からの御意見、御議論をいただき、坂根座長にリーダーシップを持っておまとめをいただいたことと心より感謝を申し上げます。最終報告の内容を重く受けとめた上で、年末に予定しているまち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂の目玉施策として盛り込んでまいりたい。また、今後、文部科学省と連携をしながら、これらに関する制度の具体化に向けた検討を進め、次期通常国会へ法律案を提出したいと考えている。坂根座長からもお話があったが、人口減少社会の中で、将来の世代の危機感を共有していくことは、大変重要である。これからも、しっかりと皆様に御意見を伺いながら、この施策に反映させるための努力をしてまいりたい。

##### (2) その他

(座長) 以上のとおり、報告書として取りまとめを終えたわけだが、今後の具体化に当たっての御意見や、報告書を離れてこういうところにもう少し配慮をしてほしいとか、そういう御意見があれば、各委員から一言ずついただきたい。

(委員) 今年2月にこの有識者会議が設置されて以来、14回、1年近く議論をして、大変意義のある最終報告を取りまとめていただき、心から感謝を申し上げたい。議論をリード

していただいた坂根座長をはじめ、各委員の皆さん、また、事務局の皆さんにも感謝を申し上げます。梶山大臣には、今、大変力強いお話をいただいたが、安倍政権にとっても、地方創生と東京一極集中是正は政権の重要なテーマの一つだと思うので、梶山大臣におかれては、これから予算編成、法案の国会審議、いろいろあって大変だと思うが、せっかく報告書がまとまったので、ぜひ、この報告書の内容を踏まえて、実効性がある形で実施していただくようお願い申し上げます。また、先ほど事務局から説明があったように、全国知事会の中でもいろいろ意見がある中で、地方大学の振興と若者雇用あるいは東京一極集中の是正のため、学生の定員の抑止等が必要だということで問題提起させていただいた経過もあるので、ぜひともこうした方向で進めていただきたい。我々も本当に本気で大学当局や地元産業界としっかり議論をして、これまでも相当積み上げてきたが、しっかり実行して、お話にあるようにキラリと光る地方大学をつくりあげたい。全てのテーマでは無理かもしれないが、幾つかの先駆的なテーマについては、国内だけではなく、国際的にもキラリと光る地方大学が日本にはあるのだと示したい。私どもでいえば、何とか富山大学にそのようなものもつくる。あわせて、産業界、また私ども行政が一体となって、医薬品やアルミなど様々な分野で、日本の地方でもこのような可能性があるのだというところを示せるように頑張っていきたいと思うので、引き続き、御指導、御支援をよろしくお願いしたい。

（委員）今、委員がおっしゃられたように、ぜひともせっかくできたこの報告書の具体化に向けて御尽力いただきたいということを、まずもって梶山大臣にお願いしたい。まだ国立大学という観点で見ると、なかなか国立大学のことが完全に理解されていない部分が多く、より社会に対する発信力を高めていく必要があると痛感した。一方で、確かにここでもいろいろ指摘されたように、ガバナンスという観点で、まだまだ法人化以降必ずしも十分ではないということも御指摘いただき、納得するところもあった。ぜひとも、こうしたことをいろいろな諸機関と連携をとりながら、改善を続け、今、委員からもあったように、キラリと光る地方大学、地方国立大学として地域の元気に向けて努力をしてまいりたい。

（委員）この問題は、東京23区の定員を抑制することだけではなく、むしろ全体最適化という話があった。それが前面に出ていたことが、今回の報告書の中でよかったと思っている。私も900ある町村の代表として出たわけだが、私自身が非常に勉強になった。もっと地方頑張れということの激励ではないかと思っているし、地方の首長あるいは地方大学の学長等々のリーダーシップは絶対に必要だと感じている。また、大学生になる前、つまり幼児教育から小学校、中学校、高校というように一貫して、どのように地方の人づくりをしていくかということは、非常に大事なことであり、私の町長の立場としては、ふるさとを愛する子供たちを、いかにずっと継続して育成していくかということが、優秀な大学生の育成につながっていくのではないかと思っているので、そこを肝に銘じて、頑張っていきたい。

（委員）このような大変有意義な議論に参加させていただき、座長、大臣、事務局の皆様、

そして委員の皆様へ感謝申し上げます。最終回にあたり2点お伝えしたい。1点は「若者の育成」に関して。「5. おわりに」に「若者こそ地方の活力の源泉である」と述べられているが、心より共感する。若者自身が夢や希望を持つことや、それを周囲が支援して育むことがいかに重要かをあらためて痛感している。一人ひとりの潜在的な意欲や能力をいかに引き出すか。もっともっと具体的な検討や行動が必要だろうと思う。もう1点は「若者の雇用マッチング」について。この場では取り組むべき課題として、そもそも魅力的な雇用を創出するということと、今ある雇用機会に目を向けてもらうという2つがあり、本質は前者だが、後者には即効性があるということで、地方創生インターンシップのさらなる推進にも言及があった。インターンシップについては、それを採用に繋げることの是非が企業の現実的な関心事として存在する。地方創生インターンシップをさらに推進する上では、この点についての整理は欠かせないのではないかと思います。

(委員) 地方と大学との関係について、私自身にとって考え直す機会を与えていただき、感謝申し上げます。私は率直に申して、最近地方大学で何回かお話することがあるのだが、先々週もある大学の経営協議会に行くと、学部長や学長先生の顔がみんな暗い。これは10年間ぐらい、予算が10%ぐらい減っているという状況もあるし、例えば病院がかなり借金をして、返すだけで当面、見通しがなかなかつかないというような話もあった。ただ、もう一方で、大学で個々の先生と話していれば、特に若手の先生は随分元気のある、面白い人がいるわけで、トップで経営層に何かプロジェクトでインセンティブを与えるだけではなく、若手の人が参加するような機会をつくっていくのがこれから非常にクリティカルになるのではないかと感じた。

(委員) まずは、地方大学及び地方産業の振興が着実に前進しないと、若者が地方から離れるという流れはなかなかとまらないだろうと思うので、そちらの方面の施策をぜひ充実させていただきたい。私どもの大学は、創立以来、地方の若者が早稲田大学で学んで、また地方へ帰るという循環をつくってきたと自負しているところである。その結果、地方経済、地方行政を支える人たちを多く輩出してきた。ところが、今、早稲田大学では創立時には80%いた地方出身者が3割まで減少している。これは大変深刻な事態だと思っている。実は、私どもの大学では、数年前4万5,000人いた学部生を今、4万2,000人まで減らしているところであり、外国人留学生が2016年で7,200人、その中から短期の学生を除いても、今、13%ぐらいの新生は外国人になっているので、日本人学生の数だけでいくともっと大幅に減ってきていて、4万人を切るところまできている。その減っている部分は、どちらかというところだと地方の学生がどんどん減っており、30年間で15ポイント、地方出身学生比率が減っている。そういう中で、前にも御紹介申し上げたように、北九州地域の学生に早稲田に来ていただいて、4年生は北九州キャンパスに戻っていただくというような循環をつくり出すシステムをつくった。あわせて、今、選考中だが、将来は地域貢献をしたいという学生の意欲を評価するAO入試制度を始めた。若干名という募集をして、何人応募してくるかを大変心配してきたのだが、350名余りの応募があり、さらに注目すべきことは、こ

のうちの4割が首都圏の学生である。大学を出たら、また大学の中で地方創生についての学習と体験を積んだら、将来は地方に行きたいという首都圏の学生も相当数いるのです。このようなところを頼りにして、地方の学生と東京とのいい循環をつくって、地方に新しい息吹を吹き込むという方向に向けての活動をさらに強化していきたいと考えている。

(委員) 報告書で、地方の大学にいろいろと御配慮いただいたことに感謝を申し上げたい。また、地方創生の新たな交付金を創設するという提案がなされたわけだが、地域一丸となって頑張っているところに対するバックアップを期待申し上げたいと思っている。また、今回サテライトキャンパスの地方移転などにも御配慮いただいたことを大変ありがたく思っている。早稲田大学が今度、新たにサテライトをつくっていただくということなのだが、私どもの街で画期的なことが始まっている。それは企業との間のコンソーシアムづくりで、地場の名門企業が皆どンドン入ってきてくれているということである。非常に風通しのいい、企業の最先端の研究者と大学との間のコミュニケーションが、組織として生まれつつあるということである。また、地方キャンパスで頑張っているところは、国公立にあると思うので、そうした御支援をよろしくお願いしたい。結びに、若者定着ということで、全国の自治体で一番毎年の人口減が大きい街で注目されていることもあり、何ができるかということで、私どもは初めて、300人の学生に、地元就職して住んだら最大54万円交付するという奨学金返還支援事業を今年からスタートした。そうやっていろいろやっており、また地方創生が叫ばれるようになったが、本社機能が逆に首都圏のほうに集まりつつあるという一面もあり、地方拠点強化税制等について、政府に大胆な対応策、戦略が生まれてくることを、地方としても期待して見守りたいと思っている。

(委員) 立派な報告書ができたことを、感謝申し上げたい。地方にいと、東京の話ばかり聞かされるということで、それで地方が活性化するのだろうかと思っていたのだが、今回の報告書は本当に地方に焦点を当ててつくっていただいております、本当にありがたいと思う。これだけ少子化の時代になり、大学の全国的な適正な在り方について、規模、配置も含めて再構築する必要があるのではないかと。そうしないと、大学のレベルが維持できないのではないかと。もう一つは、地方には、本当に中小の大学が私学ではたくさんあるわけだが、そういう中で、地域と連携をとりながら、非常に活性化している大学もある。ただ、定員割れを起こしているからだめだということではなく、そのような地域と連携をとりながら活性化している大学に対しても、御支援をお願いしたい。先ほど、坂根座長も言われたように、何事をやるにも、リーダーシップが大事である。リーダーシップがしっかりしているのは何かと云ったら、国のお金を当てにせず、自分で主導していく、お金を集めてくる、そして物事を実行していく力だろうと思う。それがあって初めてリーダーシップが発揮できるのではないかと。私のところでも限界集落と言われるようなところに研究所を持って行って、そこで地元の人たちと活性化し、市にも大変喜んでもらっているという状態も生まれてきている。そういうことをやっているところもあるのだということをお理解いただき、そういうところにも御支援をいただければと思っているとこ

ろである。いずれにしても全国の地方が活性化しないと日本は本当によくなっていかない。いろいろ法整備をしなければならぬと思うが、特に大学の法整備は人口がどんどん増えているときの法律体系になっているので、減少期になかなか対応できない。だから、そのようなところの改正も必要になってくるのではないかと思っているが、もう減少が目に見えているわけなので、今後、その辺のことをしっかりとしていかなければならないと思っているので、よろしく願いしたい。

(委員) まず、この会議の始まりのときに、座長がおっしゃった全国の産業のマッピングからやらなければいけないというお話について、私どもの短期大学としてみると、産業となかなかお付き合いがない。少子高齢化という中での役立つ人材養成をやっている。この会議が進む中で、産官学連携の中での地方の創生ということをいろいろな事例をもとに学ばせていただいて、私ども短期大学の立場としてみると、アメリカのコミュニティカレッジという制度が、短期大学のこれからの行く道かなといったところにまた回帰してきた。コミュニティカレッジの場合は、4年制の大学に編入するアカデミックなコースと、それから職業教育を行うボケーションルコース、両方ともアソシエイト・ディグリーが出るが、ボケーションルなビジネス系のものは、大学に編入できないというようなコミュニティカレッジであるが、若者または大学進学をする人たちのヒエラルキーの中でいえば、コミュニティカレッジが一番底辺の学習の機会を与えているという2年制の大学なので、短期大学もそういった形で、これからもう一度見直していくべきではないか。そして、地方創生のためにはボケーションルなコースをしっかりと短期大学の中に築き上げる。今までは、どうしてもアカデミックな学科やコースばかりなので、いわゆる職業に関連するものもあるコミュニティカレッジ形をやりたいと考えている。その際、お願いしたいのは、今、アメリカではアクレディテーションという高等教育機関の認定システムの中で、いわゆる学科とかコースをつくることのできるが、日本では、どうしても文部科学省の設置認可審査があるので、その審査期間を通してこの新しい学科やコースをつくらなければいけない。そうすると、スピード感を持ってという中で、どうしてもそこで止まってしまう。地方の小さな町で産官学連携でやろうとしても、1年、2年は平気がかかってしまって、なかなか対応できないということがある。そういったことを、早くできるようにしていただくこと。私が提案したいのは、我が国のアクレディテーションとも言える認証評価を短期大学は7年毎に一度受けており、平成30年度から第三評価期間に入る。それぞれの短期大学は短期大学基準協会の適切な認定を受けてきており、機関の全体だが、その適格認定を受けているので、社会的に教育の質保証ができていますし、国際通用性も担保しているので、その適格認定を受けた短期大学が新しく地方創生のためにコースなり学科をつくる際には、認証評価機関の手続を経て、スピーディーにできるようにすること。また、卒業生が出たときに、教育の質保証が担保されているかどうかの認証評価を受けるといいうわゆるアメリカのアクレディテーションのシステムをそろそろ導入していただけたらありがたい。そうすれば、短期大学の立場でも、この地方創生にはしっかりと対応できていくのではない

か。

(委員) まず、梶山大臣そして坂根座長のリーダーシップに感謝申し上げたい。今回のこの有識者会議での検討だが、昨年の暮れに閣議決定をされた総合戦略で書いている3点セット、すなわち地方大学の振興、地方における雇用創出・若者の就業支援、3点目が東京における大学の新增設の抑制や地方移転の促進ということであるが、この3点セットに対して有識者会議としてのお答えを申し上げたということであり、私も外部からいろいろ聞かれた場合には、必ず3点セットでお答えする姿勢で臨んでいきたいと思っている。その上で、内容として、新たな交付金の創設や、さらには23区の大学の定員抑制等について盛り込まれている。恐らくこの事柄については、文科省の告示等でも定員抑制できるのかもしれないが、先ほど大臣の御挨拶にもあったとおり、来年、通常国会に新法提出をされるということなので、単なる予算措置や大学の定員を抑えるということを経済省の告示でやるのではなく、新法を提出して、その中できちんと交付金の創設という財政支援、それから定員抑制についても法律に根拠を置く形でぜひ制度化を行っていただきたい。そして、これは高等教育の課題なので、本来的には、省庁としては文科省が取り組むべき話であって、文科省のほうで主体的に考えていただくべき事柄ではないかと私は思う。今回は、地方創生の観点、東京一極集中の是正という観点から、こちらの有識者会議で検討したものであるが、今日、文科省の方も出ておられるわけだが、文科省も自らの課題と認識をして、今後はこちらの地方創生担当部局とよく連携して取り組んでいただきたい。本来であれば、文科省が取り組むべき課題ではないのかという意見を委員が言っていたということを経済省幹部に伝えておいてほしい。2点目だが、「5. おわりに」の部分で今回、記載が盛り込まれたわけだが、18歳人口が今後、急激に減少していく。2030年には恐らく100万を切って、2040年には88万人ぐらいになるという、これだけの変化は今まで全くなかったわけであり、長期的、あるいは中期的に見ると、全国での大学の適正配置や進学機会の確保、格差是正といった日本全体を見た全体最適の問題は必ず議論していかなければいけないのではないかと。さらには、時代要請に応じた大学の新陳代謝のような視点も重要である。したがって、恐らく来年の国会審議でもそのようなことがいろいろ質疑されるのではないかとと思うが、こうした問題こそ、文科省や中央教育審議会の中で中長期的な大学の適正配置のあり方等々について、ぜひ議論していただきたい。

(委員) 今回の3点、地方の特色ある創生のための地方大学の振興、東京の大学の定員抑制・地方移転、地方における若者の雇用の創出のうち、3点目、地方における若者の雇用の創出のところについて、少しコメントさせていただければと思う。私は、もともと東京生まれで、気仙沼で起業をしており、今も地元企業で経営相談などを受けることも多く、また繊維系の中小企業との付き合いも多い。その中で非常に感じるのは、今後、地方創生のために若者にUターン、Iターンで来てもらうに当たって重要なのは、人手が足りないから単に働き手を確保することではなく、ほとんどの企業は経営戦略の見直しを一緒にやってくれるような人を戦略的に採用するということが重要なフェーズにあるということだ。

例えば、食品会社や繊維もそうだが、これまでの下請構造が崩れる中で、利幅がとれなくなってきて、過酷な労働環境になってしまい、地元の子が就職してくれないという状況は少なくない。その場合、地元の高卒の子に入ってもらっても、その会社にとっても就職した子にとっても、余り将来が拓けるわけでもない。それよりも、自分たちの技術を使って、どういい商品を開発していくか、どうマーケティングしていくかということが出来る人を、戦略的に、都会からのUターン、Iターン者含めて採用していくことが必要ではないかと思う。そういうことを考えても、地元側としては、外に出てちゃんと学んできた子をもう一回引っ張ってくるようなUターン採用、それも単に人数を引っ張ってくるということではなく、これまで世襲を続けていた企業が経営陣として都会で修行してきた若者を迎えるようなことが必要になってくるのかなと思う。地方創生インターンシップの推進なども非常に重要なことかと思うが、地元企業が、そもそも経営を転換していくに当たってどのような人材が必要なのかを考えて、ヘッドハンティング的な採用をしていけるような場をサポートすることも一つ重要ではないかと思う。

(座長) 約1年間、いろいろな御意見をいただきながら、まだまだ足りないところはあると思うが、最終報告書とさせていただいた。もう報告書の中に盛り込まれているが、私も幾つか、これが重要だなと思うものを繰り返しになるがお話したい。まずは、東京の大学の役割が、地方からヒト・モノ・カネを集めるのではなく、国際的に集めるほうに、東京こそ変わるべきだと思っており、そのような観点から見たときに、海外から来る留学生は日本に何を期待し、どのような特色で日本に引っ張るのか、それが東京の国際都市化にどう生きるのかという視点でもう一度考えてみる必要があるのではないか。また、地方へのサテライトキャンパスの話があるが、やはり東京の大学のほうがよいリーダーの人材がそろっている場合があり、地方の大学の活性化というときに、東京の大学がそれを支援する。サテライトキャンパスといっても、地元の行政や地元企業の支援がないと東京の大学も経営的に相当苦しいと思うので、ぜひそういう視点でお願いしたい。2つ目は、この国のかにかく一番大きな基本問題は、企業もそうなのだが、特に大学は、いろいろな分野と連携するということが大事で、行政や企業との話し合いをするだけでも相当大学は変わらと思う。今回、大学の話をしていろいろ聞きながらびっくりしたのが、本当に地方の大学も地元企業や行政と全く遊離して、大学の中だけでいろいろなことを考えているのだなということである。私自身も、会社経営の中で一番変わったのは、とにかく世の中で一番進んでいる人と話をしよう、世界中の一番進んでいる人を見つけて話をし、何か一つでも我々の参考になるもの、あるいは人材、技術といったものを取り入れていこうと変わったことが、一番大きな変化ではなかったかと思う。この話をすると、余り企業と連携が強くなると、ノーベル賞級の基礎研究がおろそかになると言う人がいるが、私はそこはそこでもっと絞り込んで、国がもっと重点的に支援するべきだし、それ以外のビジネスとの関係の部分は民間企業あるいは金融機関といったところがお金の出し手になるべきだと思っており、今回の交付金もさることながら、ベンチャー基金がもう少し大学に使われるようにならない

とだめなのではないかと思う。それから、間接コストなのだが、私どもの会社でいうと、私が2001年に社長になったときにコマツの当時の売り上げの1兆何千億の24%が間接コストだったのが、今は16%であり、8ポイントをこれで生み出しているのだが、やったことは、ITの仕組みを何でも自前主義でつくって、きめ細かく仕事をすればするほどいいと思いつけてきたそれまでのカルチャーを、既存のシステムなどの既製服を着てみて、それに合わない仕事は本当に要るのかという検討をやったのと、いろいろな事業に手を出して、雇用を確保するために多角化を進めてきたやり方が限界に来ているところである。この国では、生産性が低いという話が今、政府の課題になっているが、一人一人の人間の能力、生産性が低いとは私はとても思えない。結局、余分な仕事をやったり、自動車業界もそうだが、建設業界も2次下請、3次下請、4次下請、5次下請となると、必ず間接コストが一つ一つ発生する。この国はITの仕組みを初めとする間接コスト、多重層になっている部分に手をつけないと、生産性は変わらないと思う。その意味で、委員もおっしゃるように、大学の先生方の待遇は決してもう余裕はないのだが、私は大学こそみんな同じような間接業務をやっているのではないかと思う。だから、ここの部分を何とかスリムにしたり、みんなで共用してやるようにするだけでも、先生方の待遇に回せる経費を生み出せるのではないかと考えている。経理会計みたいな仕事ですら大学ごとにみんな違うことをやっているはずで、このような部分にも、具体的に国のほうも少し入っていただき、間接業務を大学間で共用することでコストを削減、経費を生み出して、大学の研究や待遇のほうに回せるようにならないか。幸い、今、非常に雇用がタイトになってきて、かつ団塊の世代の退職を迎える時期なので、学部・学科の再編などに伴う雇用問題もこの時期にやらないとチャンスが来ないのではないかと思う。

(松本副大臣) 坂根座長の話聞きながら、感動を久方ぶりに覚えた。かつて草莽崛起という呼びかけをしたのは、松下村塾の吉田松陰だったと記憶をしているが、坂根座長が大手大企業、東京に頼るのではなく、地方のキラリと光る大学から将来の若者にこの国の将来を託したいという発言を聞くと、心高鳴る思いである。皆様からいただいたこの報告書を、どこまで実現できるかが問われていると責任感を覚える。力一杯取り組んでまいるので、どうぞ今後とも御指導賜りたい。

(梶山大臣) 改めて、最終報告をいただいたことを、心より感謝を申し上げる。今、それぞれの委員から御意見もいただき、この御意見も最終報告の一部だと受けとめて、しっかり実行に移せるように、努力をしてまいりたい。また、さまざまな場面において皆様の御見識を頂戴することになろうかと思うので、よろしくお願ひしたい。先ほど、委員からも3点セットのお話が出たが、これは息の長い取り組みだと思っている。まず、この報告書をつくっていただき、そして制度を創設する。また、予算を確保していく。そして、それらがずっと続けられるような仕組みづくり、意識づくりもしていかなければならないと思っている。明日、私は高知県に行き、高知大学にも訪問する予定だが、農業でいえば適地適作といわれるように、それぞれの地域でそれぞれの特色があるわけであり、この目的を

しっかりと果たせるような努力もしてまいりたいと思っているので、それぞれのお立場から、また御指導をよろしくお願いをしたい。長い間、座長をお務めいただいた坂根様に、また改めて感謝を申し上げ、また委員の皆様にも重ねて心より感謝を申し上げます。

### 3. 閉会